

装飾古墳にみる他界観

Views on Death and the Other World, as Seen from Decorated Tombs of the Kofun Period

白石太一郎

はじめに

- ①北・中九州の石棺系・石障系装飾古墳の図文の意味
- ②北・中九州の壁画系装飾古墳の壁画の意味
- ③北・中九州の壁画系装飾古墳にみられる東アジア系モチーフ
- ④九州の装飾古墳と他界観

【論文要旨】

墓室の内部の壁画や彫刻などが、何らかの意味でその墓を造営した人びとの他界観・来世観を反映していることはいままでもない。この小論は、九州の装飾古墳を取り上げ、そこに表現されている絵画や彫刻の意味を追究し、その背景にある人びとの他界観を追究したものである。北・中九州の装飾古墳は、石棺系、石障系、壁画系の順に展開する。このうち5世紀代に盛行する石棺系や石障系の装飾古墳の中心となる図文は、魂を封じ込めたりまた悪しきものから被葬者を護る辟邪の機能をもつと考えられた直弧文と鏡を表わす同心円文である。やがてこれに武器・武具の図文が加わるが、これも辟邪の意味をもつものであった。また直弧文はその弧線の部分を省略した斜交線文となり、その後の装飾古墳で多用される連続三角文へと変化して行く。6世紀になると墓室内部に彩色壁画を描いた壁画系の装飾古墳が出現する。そこでも基本的なモチーフは5世紀以来の辟邪の図文であるが、新しく船や馬の絵が加わる。船のなかには大洋を航海する大船もみられ、舳先に鳥をとまらせたり、馬を乗せたものもみられる。この船と馬は死者ないしその靈魂を来世に運ぶ乗り物として描かれたものであり、海上他界の思想がこの地域の人びとの間に存在したことを物語る。6世紀後半には、一部に四神の図や月の象徴としてのヒキガエルの絵など高句麗など東アジアの古墳壁画の影響もみられるが、それは部分的なものにとどまった。一方、南九州の地下式横穴には、この地下の墓室を家屋にみたてた装飾が多用される。これはこの地域の人びとの間に地下に他界を求める思想があったことを示すものであろう。同じ九州でも北・中部と南部では、人びとの来世観に大きな相違があったことが知られるのであり、北・中九州の海上他界の考えは、海に開かれ、また東アジア諸地域との海上交易に活躍したこの地域の人びとの間で形成されたものと理解できよう。